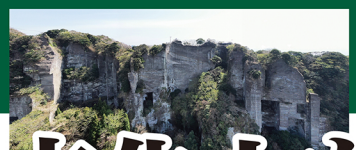


鋸山日本遺産候補地域認定応援企画 第2弾

令和3年7月16日に、鋸山を舞台に華開いた歴史や文化芸術が日本遺産「候補地域」に認定されました。

文化人をも魅了した「鋸山」～鋸山にまつわる作品たち～

学生だった漱石が23歳の夏休みに友人4人と房総旅行に出掛け、その見聞をしるした漢文紀行です。

『木屑録（ぼくせつろく）』

◎夏目漱石

明治22（1889）年、若き日の夏目漱石から、友人正岡子規に宛てた漢文による房総旅行記。

漱石は、正岡子規の「七草集」に触発され、次は自分が、漢詩文の紀行文集で、子規をもっと驚かせてやろうと考えます。それが「木屑録」の誕生となるのです。

漢文は現代人には難解ですが、現代語訳や解説書も出ています。

●『夏目漱石の房総旅行「木屑録」を読む』（斎藤均著 崙書房出版 1992）

●『漱石の夏やすみ 房総紀行「木屑録」』（高島俊男著 朔北社 2000）

●『漱石の夏休み帳 房総紀行「木屑録」』（関宏夫著 崙書房出版 2009）

『かくれみの』

◎正岡子規

漱石の「木屑録」に触発され、明治24（1891）年、子規も房総にやってきました。

市川から成田、大多喜、小湊、鋸山を廻った旅日記です。子規は鋸山へ登った際に、「山から盛んに石が切り出されている。百年後には鋸山は地図から無くなってしまうのでないか。」と危惧する様子を日記につづっています。

●『かくれみの街道をゆく 正岡子規の房総旅行』（関宏夫著 崙書房出版 2002）

『不二三十六景』

浮世絵師

◎歌川広重

こんな絵じゃよ

36・安房鋸山（あわのこぎりやま）

「安房鋸山」は手前に鋸山、奥に浦賀水道越しの富士山を描いた図で、広重は嘉永5年2月に房総半島を旅行して鋸山を訪れ、『房総行日記』を記しています。

実体験にもとづく臨場感があります。

漱石、羅漢像に会う

参考：菱川師宣記念館

「どれも実に様々な姿で、表情にも富み、一つとして同じものがない。石仏を彫った石工の心づかいが知れる。配置についても、ただ一カ所に集めたのではない。最初に二百体ほどの石仏を発見し、我らは羅漢のすばらしさに感嘆したが、すぐその岩角を回ると、さらに百体ほどの石仏が並んでいる。頭上を見上げれば、巨大な岩が群がり、今にも崩れ落ちそうだ。恐ろしくて目を転じると、岩の上にもまた数十体の石仏。また狭い道を進んで尽きたところに、洞窟が広々と口を開け、羅漢がぎっしりと並んでいる。我々は歩むに従って異なった景観を見せられ、優れた羅漢像たちが予想外の場所に現れるのを見て喜んだ」。

『連環』講談社 1962年11月

◎松本清張

虚構に生きる男が、追跡者の執念にあえなく自滅してゆく過程を描く傑作。鋸山ロープウェイができたころが舞台となっており、石切場や五百羅漢を通って山を登り内房の海岸線を俯瞰する。

『鋸山心中』小説新潮 1988年9月

◎吉行淳之介

淳之介は大正13（1924）年4月13日、父：エイスケ（モダニズム詩人）と母：あぐり（美容師）の長男として岡山県岡山市に生まれ、東京麹町（現：千代田区麹町）に育った。淳之介が小学校低学年であった昭和7（1932）年から9年頃、避暑のために竹岡村・金谷村（現：富津市）を何度か訪れている。この時の回想が、後年『鋸山心中』という短編小説となって発表されている。

文中に出てくる竹岡駅は昭和5（1930）年8月に開設されており、駅ができて間もない頃であった。この時代は、上海事変、五・一五事件、小林多喜二の検挙、虐殺などが相次いで起きた暗い緊迫した世相であり、房総沿岸は要塞地帯指定で写真撮影もままならなかった。そんな時代背景でありながら、この作品には当時の竹岡周辺の、のどかで風光明媚な漁村風景が描かれている。

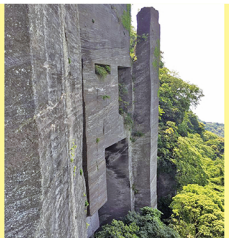
日本寺境内に小林一茶や長谷川馬光などの句碑も建立

長谷川馬光
引きおろす鋸山の霞かな

小林一茶
阿羅漢の鉢の中より雲雀かな

第1弾を見たい方はコチラから➡

房総半島は最高峰が標高400m台で、初心者でも気軽に登れる山がたくさんあります。そこでは、歴史や四季折々の景色や自然を体感し、登山やハイキングを楽しむことができます。そんな房総の山の中で、今回は2021年7月16日（金）に「日本遺産の候補地域」に認定された「鋸山」を紹介しました。



ラピュタの壁

金谷から見た鋸山は、西に東京湾と富士山を望み、ギザギザとした断崖が東西に連なり、迫力のある景色を構成しています。窓のように開いた横穴は、良質な石材を求めて地層に沿い、奥へと切り進みできたものです。驚くほど垂直な、そして淡々と同じ間隔で石が切り取られた跡は、まるで巨大な彫刻のようです。最大垂直面96mの絶壁である石切り場跡は、その壮大な景観から、天空の城ラピュタを連想させ、いつしか「ラピュタの壁」と呼ばれる様になりました。